

**里山グループ**

菊川年明

**里山の今****エコファームグループ**

池山怜子

## ◆ 最近のならやま里山林

私が本会に入会したのは平成20年4月で、本会がならやまに進出してから、ほぼ1年後である。当時のならやまは、平地の大部分は丈余のメタケと雑草が生い茂り、山中は大木化したコナラなどで薄暗く、地表はアカマツなどの枯木、倒木で、歩くこともままならぬ状態であった。

そのような状況から、初期の作業はメタケ、雑草の刈り取りと、枯木、倒木の処理が中心であった。当時のならやまは、30人に満たないくらいの人員で作業に当たっていた。

平成23年だったと思うが、コナラなどの大害虫カシノナガキクイムシ（以下、「カシナガ」と略す）が若草山周辺の雑木林に襲来したと報じられた。カシナガ被害がならやまに伝播するのは必至の情勢となり、同年からカシナガを早期に発見するための調査が始まった。

平成24年には、ならやまのコナラの木にカシナガの穿（せん）入孔が見つかり、たちまちのうちにナラ枯れ被害が広がった。平成29年にはナラ枯れは終息したが、被害を受けたコナラの倒木はあとを絶たずという状態になった。そして今も倒木・落枝は根絶に至っていない。

里山グループのコナラ調査によると、おおまかな数字でいえば「ならやま里山林」の区域で平成23年度に2000本近くあったコナラが29年度には1000本余しか残っておらず、減少の大方はナラ枯れである。枯死木はその都度処理されてきたが、大変な労力を注いでのことであった。

林内では、これまで、大きなコナラのために地表に日差しが届かず、コバノミツバツツジやモチツツジは生育不良で、しょんぼりしていたが、最近元気になり、春にはコバノミツバツツジが、そのあと初夏にかけてはモチツツジが、みごとな花を咲かせるようになった。カシナガのせめてもの罪滅ぼしであろうか。



## ◆ ファームの今

昨年秋に種をまいた菜花が今を盛りに春を告げている。これが毎週、ほのぼのの市をにぎわしている。

「春の膳には苦みを盛れ」といわれるように自然の草木の芽吹きは、おのおの種の防衛のため、あくがあるのだとか。このあくを取らずに食すことも春の楽しみである。大和真菜、チンゲン菜、大根もとうが立ち始め花の準備をしている。これをごまあえ、白あえ、煮合わせのあしらい、バター炒め、また漬物などにも柔らかく最適である。

冬の間、おいしく楽しませてもらったYRくらま大根の後地を中西さんお得意の耕運機が活躍して、十分な堆肥もすき込まれて、次の作付け準備も万端整った。このファームの一等地に2月21日、かねてより念願のアスパラガスが植え付けられた。この株はかなりの高価だと聞いてびっくり。3株を15株に分け、30cm以上もあるたこ足状に広がった根を出来るだけ伸ばし植え付けた。オツとその前に長い根が乾いているので、バケツに水を張り、株に水分を含ませるのだと声が飛んだ。

ここからは少々調べた知識。植え付けて1年目は収穫を控え親茎として残し、地上部を茂らせ、光合成によって根に養分が蓄えられるようにするのだそうだ。アスパラの株には雄株、雌株があり、それぞれ雄花、雌花が咲き、雌株は受粉後、実がなり種を残す。雄株には実はならず、その養分は地下茎に回るため翌年の若茎に寄与し、収穫量に影響するという。アスパラガスには疲労回復や新陳代謝を促進する効果があるともいわれるアスパラギン酸が豊富に含まれている。また穂先の部分には、毛細血管を丈夫にし、動脈硬化の予防や若返りに期待できるという。プロジェクトメンバーには、まさに夢の野菜である。この先、10年から15年は繰り返し収穫を楽しめる。そのためには支柱や敷きわらなどを怠らず夏場の乾燥対策、追肥など長期の管理が大切だそうです。

**景観グループ**

田中 善英

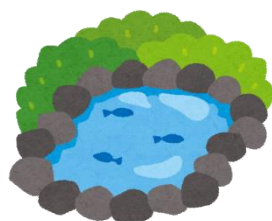
◆里山の水辺の風景 (里の池)

JRの線路をくぐると「ならやまの自然」が見えてきます。初めに目に入るのが西池、どじょう池、蓮池などの水のある風景。そして、その先に目をやると里山の草木の緑が広がっています。

この場所を知ってから5年、ならやまの水や土に触れるようになって1年余り。このごろは「水は手ごわいなあ」と思うことが多くなりました。

西池から東を見るとこの土地は谷底に見えます。水はけが悪く、この地を利用するためにならやまの外に水を排出する山裾の排水溝があります。でも西池やどじょう池などの池にすんでいる水生の動植物には安定的な水の供給が必要なため、排水溝から再び水を引き込んでいます。

他にも水が染み出ており、このような複雑な水の流れを可能にするための先人の知恵があちこちに見られますが、水は素直に言うことを聞いてく



れません。池に泥が流れ込み、また、湿地は水がよどんでいます。

里山は人が利用し、共存する自然であり、人の

手が入らないと維持できないといえます。

では、里池と人との共存とは何でしょうか。

私の田舎では、池というと農業用水用のため池であり、そこで魚を養殖して冬の池ざらいで一網打尽にしてみんなで山分けというのが一般的でした。でも、ならやまの里池はならやまの自然に溶け込む里池であり、水辺だと思います。

人のできることは限られます。手ごわい水の流れと折り合いをつけながら、里池に安定的に生物に適した水を供給するルートを作ること。そして、ただ生物が集まり、繁殖するのを待つことです。

先日、アオサギが西池に来ました。カワセミも来るそうです。先人の努力が実り、里池が「ならやまの風景」になり、生物があふれることを楽しみに、先人の知恵を得て、また、試行錯誤を繰り返しながら水のある自然を楽しみたいと思います。



**パトロールグループ**

菊川 年明

◆4月の観察路

4月の観察路は、サクラの花と前後してコバノミツバツツジの濃いピンク色が里山林を彩ります。最も美しいのは実りの森の奥の松山平と名付けている地区です。小さなアカマツが生えているだけで、日当たり抜群の環境がコバノミツバツツジの生育に適しているのでしょう。

その他の区域では、従来は大きくなりすぎたコナラの木に日差しが遮られて、コバノミツバツツジはわずかに生命を保つのが精一杯というありさまでしたが、ならやまにカシノナガキクイムシが襲来し、コナラの大木をどんどん枯死させましたので、その結果、上空を覆うものがなくなり、日当たり良好の箇所が随所にできました。今までしょぼりしていたコバノミツバツツジが元気になり、みごとな花を咲かせるようになりました。カシノナガキクイムシが残っていた唯一の置きみやげかもしれません。

**コバノミツバツツジ**

地表ではシハイスミレ、ニオイタチツボスミレなど、いろいろなスミレが咲きます。



観察路のトピックスは、第3コースの、登り口からコシダの辻の間にある観察路で随一の急傾斜のところ、頑丈なはしご式の階段を設けたことです。パトロール班の私を除く男性陣が総掛かりで、活動日を4回費やして完成させたものです。何分にも動力運搬車も入れないところですから、



はしご式の階段

資材を運び上げるだけでも大変な作業でした。